マタイ 15 章 21-28 節
「“立派”な信仰」

イエスさまが立ち退かれたツロとシドンの地方とは、カナンの地にあります。イエスさまは、十字架の最後の時を前にして、静まる時間と場所の確保したかったのでしょう。イエスさま一行は、ガリラヤを通り抜けて、北にあるツロとシドンの地方に立ち退かれたのです。

この地方でイエスさま一行は、叫び声をあげてついてくる母親と出会いました（22節）。どうやら、イエスさまのうわさは、異邦人の地にまで流れていたようです。イエスさまは、叫びながらついてくるこの母親に対して、無言の姿勢をとられます。それは彼女の信仰をテストするという意味もあったのでしょう。そして24節のように答えました。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」と。イエスさまの働きは、この言葉にあるように、まだ異邦人には及ばない。イスラエルだけに限られている、と伝えました。イエスさまは、まだその時ではないと答えておられます。そんなイエスさまの姿勢に対して、彼女は諦めませんでした。彼女は作戦を変えてみます（25節）。彼女はイエスさまの前に来て、ひれ伏して懇願したのです。ある意味、捨て身の行動です。するとイエスさまの応答は変わりました。けれども、願いを聞いてやろうとも言わない。はぐらかしているような答えです。イエスさまはここで、彼女にも理解できる比喩を用いています。「子どもたちのパンを取って子犬にやってはいけない（26節）」と。イエスさまの言う「子犬」とは、「家で飼うペット犬」のことで、家族同様に扱われ、養われていました。ですから、ここでの意味は「あなたを野良犬として扱わない。あなたには可能性がある」ということをも意味しているのです。彼女が本当に信仰をもっているのならば、「子犬」という表現から、まだ自分にもチャンスはある、と気づいて、「子犬」ということばを、恵みを受ける踏み台に変えてしまうことができるからです。そして彼女はまだチャンスはあると思い、27節のように答えます。「主よ。その通りです。ただ、子犬でも食卓から落ちるパンくずはいただきます」。彼女は、ユダヤ人が優先ということを理解した上で、子犬がもらえる恵みを待ち望みました。また、22 節の「ダビデの子よ」と彼女が呼んでいる、その呼びかけは、来たるべきメシヤに対するユダヤ人が使う呼び方、「救い主」を意味します。また世界に君臨する「王」をも意味します。彼女はその認識に立って、ユダヤ人顔負けの信仰を見せたのです。

そんな彼女の信仰に対するイエスさまの応答は次のようでした。「ああ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」（28節前半）。彼女は、イエスさまがどういうお方なのか、完全に知っていたわけではありません。しかしイエスさまをメシヤとして、信じる信仰は持っていました。イエスさまという主人は、子犬を養ってくださるという偉大な信頼を見せました。こうしたことが総合されて、彼女はあきらめない粘り強い信仰を発揮し、パンくずをいただくことになりました。受けた恵みは、パンくず以上の恵みになったことでしょう。

今日の大切なポイントは、イエスさまの子犬の立場に自分の身を置く、ということです。主人を信頼し切っているペットのような信頼があった。主人イエスさまという偉大な人格への信頼の厚さがすべてを生み出す、ということです。イエスさまの愛に、またその力に信頼を置きたいと願います。